

住友の歴史(上・下)

平成28年5月28日(土)10:00~11:30

元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

別子銅山の正史ともいふべき住友別子鉦山史が、上巻・下巻・別巻の3セットで別子銅山開坑三百年を記念して刊行されて久しい。住友の歴史(上・下)は、住友史料館からまとめた形の本の刊行で、住友別子鉦山史の刊行後に判明した内容が盛り込まれている。上巻と下巻の527ページは読み応えがある。住友が与えられた歴史的条件の中で苦闘してきた結果、グローバル企業群にまで築き上げてきたその足跡をたどってみる。

2. 本の刊行

平成25年8月15日 上巻が発行される。

平成26年8月15日 下巻が発行される。

3. 本の構成

上巻下巻の二部構成

上巻

口絵1 文殊院旨意書

口絵2 別子銅山真景図

口絵3 型銅(長棹銅、棹銅、樋丁銅、丁銅、丸銅)

口絵4 清水家門札の井桁

はじめに

目次

第1章 創業者の肖像

第2章 東南アジアの銅貿易と住友

第3章 火と水と土石とのたたかい

第4章 鉦山都市と積出港市

第5章 銅貿易を支える仕組み

第6章 銅の生産と関連諸産業

第7章 住友の江戸進出

参考文献

住友家系図

略年表

表・図・写真一覧

索引

下巻

口絵1 住友家法

口絵2 住友友純

口絵3 住友友成

口絵4 別子銅山

口絵5 住友ビルディング

口絵6 住友の事業展開

はじめに

目次

第 8 章 イエの構成と組織

第 9 章 大名との交際

第10章 都市大阪が育んだ住友

第11章 文化と公共への貢献

第12章 幕末・明治の変革

第13章 近代化への対応

第14章 世界市場への参入

おわりに

参考文献

住友事業沿革図

社名略称一覧

略年表

表・図・写真一覧

索引

4. 本の概要

第 1 章 創業者の肖像

住友家の初代・住友小次郎政友は、京都で新興の涅槃宗の幹部であったが、弾圧により員外沙門となり薬業と本屋を営む。広い心と器の大きい人柄で、すぐれた人格を求めたところに、住友家の独特の伝統を形成することとなる。「文殊院旨意書」で明示した心得が住友の伝統的精神として今日まで貫ら抜かれている。

員外沙門－涅槃宗は他宗派の攻撃と幕府の宗教政策によって天台宗に併合されたが、住友政友はいずれの宗派にも属さぬ僧侶として「員外沙門」と自称した。沙門は、古代インド社会でバラモ

ン階級以外から出家を容認した仏教・ジャイナ教の僧侶に対する呼び名。

第 2 章 東南アジアの銅貿易と住友

東南アジアと銅

日本産銅の第一波は奈良時代で、象徴として奈良の大仏建立がある。第二波は16世紀の金銀山開発後の17世紀である。ポルトガル、中国、オランダがたずさわる。主要部は唐船であったが、オランダ東インド会社が積極的であった。

住友の銅貿易と銅鉱業の始まり

住友は銅を本業として発展した企業で、400年の歴史を有する。南蛮吹の開発者の蘇我理右衛門は住友の業祖として、家祖の政友とともに住友の歴史の起点となる人物である。二人は義兄弟で、涅槃宗の門弟であった。蘇我理右衛門の長男が政友の婿養子になり泉屋住友家という銅商売の家を興す。京都から大阪に進出し、秘伝の南蛮吹を同業者に公開する。そして大阪は銅の中心市場となる。

江戸時代の銅山と産銅高の推移

江戸時代の最盛期には、産銅の1/4を別子が担った。秋田、南部、別子の大銅山と多数の小銅山に分化していた。秋田、南部、別子が御用銅山として長崎貿易を支える。第一次大戦終了まで日本は銅輸出国であった。

住友の銅山経営の始まり

住友は銅の買い付けから銅山経営に参入するが、銅山では後発の業者であった。備中の吉岡銅山、出羽の幸生銅山さちゆうをはじめとして全国で経営する。銅山経営の技術や経験、資金力が認められて別子銅山の開坑となる。銅山稼業で集まる情報をまとめたのが「宝の山」、
「諸国銅山見分ひかえ扣」である。

コラムー切り上り長兵衛

住友の探鉱記録「宝の山」に、伝説の鉱夫として「切り上り」が登場する。しかし、別子銅山の項には出てこない。ところが別子開坑後80年近くたった「予洲別子御銅山未来記」には発見者として登場する。別子銅山の衰退期なので、銅山の永続願望として登場して伝承されてきたようである。実在の人物か否かはわからない。

切り上り長兵衛ー「別子開坑二百五十年史話」には、「元禄三年、秋のことである。時の住友家吉岡鉱山の支配人、田向重右衛門は、図らずも阿波生まれの長兵衛といふ廻切夫から、豫洲の幕府領、宇摩郡別子山村の足谷山中に、とてもすばらしい大鉱脈があるとの報告をうけた。――。。」と開坑の項が書き始められている。

しかし、「住友別子鉱山史」では、「別子銅山の開坑」の項で、「元禄三年秋、泉屋経営の備中吉岡鉱山支配人の田向重右衛門の一行は、――川之江陣屋詰めの手代衆に断って、宇摩郡天満村よりおぼこ峠、乙地を経て踏査見聞したが、これは切り上り長兵衛という巧者の堀子からの報告によると伝えられている。」と書き、伝説としている。

従来の本は「別子開坑二百五十年史話」を底本としていたので、史話が史実のように捉えられた形でその後に刊行された本には書かれてきた。

第 3 章 火と水と土石とのたたかい

別子銅山の開発と発展

鉱山業は自然とのたたかいであり、投機性から山師と呼ばれた。住友には経験と熟練の技と資金力があつた。住友はほんとうの山師であつた。そして、事業の母体となつた別子銅山にめぐりあい、大自然の火と水と土石とのたたかいの中から人知の限界を超えた魂を学び、鍛え磨き挙げた。

別子銅山は物語をもつて発見された。貧しい別子山村に鉱山都市が忽然と誕生した。当時日本は世界一の銅を生産し、別子銅山はその原動力になっていた。

銅山永続に向けた戦略

天満道から新居浜道へ使用変更を試みるが、立川銅山との関係で思うように進まなかつた。幕府の長崎貿易銅の確保に乗じて、経費削減と経営助成を願い出て、新居浜道の確保、永代請負と立川銅山との合併へと布石を打つ。

苦難に満ちた銅山経営

やがて宿命の遠町深鋪現象が進み減産が続いた。1703年(元禄16年)10月に新居浜道が開通して新居浜浦が外港となつた。冬期には運搬路が雪でふさがれるので、別子銅山の定住人口3000人のために米、生活物資、薪炭が備蓄された。

別子と立川銅山の合併で、寛永疎水坑道から国領川側への排水が始まつた。

別子開坑から閉山まで、海拔1100m(正しくは1200m)歛東坑(1番坑)から海面下950mの32番坑道まで及ぶが、江戸時代は海拔750mの三角まで350m(正しくは450m)掘り進んだに過ぎなかつた。しかし、絶え間なく涌きだす涌水の排水は常の課題であつた。寛永坑開削工事が幕府に認められず、海拔1100mの代々坑の開削に着手する。箱樋160挺で三角から290mあまりを引き上げていた。海拔914mの小足谷疎水開削を企画したが徳島藩の反対で中止した。高松藩の久米栄左衛門に涌水処理法の考案を依頼した。水没した三角の排水に成功したが、安政地震の涌水で富鉱帯は再び水没した。オランダ製のポンプを導入したが、箱樋よりも効率が悪いものであつた。排水の効率性から1868年(明治元年)になって広瀬宰平によって小足谷疎水坑道の再開削が行われた。

※標高の誤記はこの箇所のみで、次の箇所では正しく標記されている。

災害への対応

別子銅山では災害が発生すると、長崎貿易銅が減産になるのでその都度、幕府に被害届が提出されていた。水害は夏季、火災は冬季・春季に発生傾向にあった。

江戸期の災害の中で最も悲惨であったのは、1694年(元禄7年)の元禄大火災であった。別子銅山支配人の杉本助七など132人が亡くなった。立川銅山からの向かい火が被害を大きくしたといわれているのは、うわさ話として報告された内容であった。幕府の災害調査のコスト計算から別子・立川銅山の合併に向かう。

元禄大火の翌年には風水害にみまわれた。1743年(寛保2年)と翌年にも風水害にみまわれていた。1804年(文化元年)の大風雨の幕府助成金は、間接的に江戸中橋両替店の開設資金となった。

向かい火－従来は、立川銅山は老衰期に入り貧鉱の採鉱となっていたので、開坑して間もない富鉱を採鉱していた繁栄期の別子銅山への日ごろの妬みから火を放ったといわれていた。

犠牲者の慰霊と諸相

元禄大火の後に、延起の端に山神社(大山積神社)が勧請され、犠牲者墓地の背後の高台に観音堂が建てられた。助七ら手代4人は当時の勘場(歛喜・歛東坑前)下の沢に土葬された。その後132人の殉職者の50回忌が行われ、諸霊忌日には年忌が記されている。住友家では主家と店員・稼ぎ人がいっしょに祀られている。

1790年(寛政2年)、開坑100年祭が行われた。山内安全の祈祷、無縁者の供養として山神社・稲荷宮・観音堂で2夜3日の祈祷が行われた。

別子銅山開坑の功労者の田向家、杉本家は末家中の末家として特別に処遇されてきた。

田向家・杉本家－川田順の住友回想記には、「執務時間中に舶来雑貨を売りに来る着流しの若い男がいた。「タヌキ、タヌキ」と呼ばれていた。妙な名前の男と思った。毎年春の彼岸時分に「家長誕辰の宴会」が中之島ホテルで催された。家の子郎等を招いて御馳走する。私も呼ばれて末座にちいさくなっていると「タヌキ」が羽織袴で来て上座に座った。

タヌキの優遇を先輩に聞くと、二百数十年前に備中吉岡銅山の支配人として勤めていた田向重右衛門の十数代目の孫であった。重右衛門は、元禄3年の別子銅山探検で大鉱床を発見した功労者である。先祖の功労によって田向家は住友末家に列せられているのである。

翌年の宴会で「イズカン」を知らんと先輩に叱られた。心齋橋の「おしろい屋イズカン」の泉屋勘七であった。田向と別子銅山探検に行き、別子支配人として元禄7年の火災で亡くなった杉本助七の末裔であった。」と、その驚きが描写されている。

コラムー蘭塔場

観音堂と呼ばれた円通寺分院が置かれた場所。1878(明治11年)、広瀬幸平が元締・杉本助七ほか手代3人の碑石を現在の蘭塔場に上げた。元の蘭塔場は旧勘場(歓喜・歓東坑から10m下)の沢下にあった。そして1916年(大正5年)の採鉱本部撤退で、蘭塔場の墓石は瑞応寺の西墓地に移された。円通寺分院も明治になると円通寺出張所と称して小足谷墓地の板小屋地藏堂へ、さらに南光院境内に移った。

蘭塔場ー従来は元禄7年の大火災で亡くなった132人全員の集合墓所と説明・標記されていた。被害者の埋葬の仕方は違っていた。蘭塔場と呼んでいる丘の使い方も現在とは違っていた。

第4章 鉱山都市と積出港市

描かれた鉱山

別子銅山を一つの経営体として南面と北面の双幅画に桂谷文暮が描いた。(「別子銅山図・双幅」)厳しい山岳地帯を開発し、都市を作り上げた先人の営みが捉えられている。桂谷が描いた「別子山内図」「別子銅山図屏風」「別子銅山絵巻の下絵」なども残っている。

別子銅山図・双幅ー天保12年に大阪本家に届けられたもので、住友家伝来品として残っている。構図の着想は、文化6年の画冊「図面簿」らしい。鮮明な描写とやわらかなタッチが特徴である。住友別子鉱山史別巻の図録の最初のページに掲載されている。

山中の都市

「別子山内図」は、今でいう旧別子を都市として描いている。大山積神社を中心にして、採鉱の舗方、統括本部の勘場、製錬の吹方の主要参施設が描かれている。山中ではあるが、都市での時間感覚に満ちた生産の場が浸透していたことがうかがえる。勘場を都市の中心として施設が配置され、番屋、裏門で以て町全体が監視下の空間となっていた。

別子銅山で働く人は、住友の店員と稼ぎ人で構成されていた。店員は、支配人、元締、役頭、手代、見習の階層があり、現地雇いの仲間、宰領、小者の階層があった。人数は120人前後であった。

稼ぎ人には様々な職種があった。採鉱では掘子、得歩引、水引、砕女、鉋持。製錬では銅吹大工、手子。ほかに、鍛冶、日用、焼木伐、炭焼、鍛冶炭焼、木挽き、炭山仲持。江戸時代には3000～3800人の定住人口を持つ鉱山都市であった。周辺の村からの通う人が別にいた。

稼ぎ人の住居を除けば大部分を生産設備が占め、山の斜面を利用して工程順に効率よく配置されていた。

舗方の大きな建物内には歓喜坑、歓東坑があり、掘り出された鉱石は計量されて、住友の店員が買い取った。坑口の横には浴場があった。鉱石は坑口から階下の金場に運ばれ、

碎女が金鎚で割って選鉱した。選鉱された鉱石は大山積神社下の斜面の焼窯に運ばれ、半月焼き、半月で冷まされた。焼鉑は斜面を下った川沿いの吹所で純度90数%の粗銅につくられた。生産された出来銅は表門側の銅改役所で計量され、勘場下の銅蔵に保管された。炭は弟地炭宿から運び上げられ、裏門そばの炭改役所で計量された。生産地によって御料炭と他領炭に分けられた。鉱山都市は厳重に管理されていた。

「別子山内図」には、本舗から東方採鉱の開発という時代状況が反映されている。天満や東延で掘り出された鉱石は土鉑と呼ばれ品質が劣っていた。その分技術対処やコスト意識が高まった時代となった。

鉱山の環境と生活

後に伊予小松藩の藩校教授になった近藤篤山が父に従い来山した。帰山後に別子銅山を漢詩に詠んでいる。儒者の目には稼ぎ人たちは無法者に映っていた一方で、厳しい環境ではあるが、外部から必要な物が運び込まれ豊たかに暮らしていると讃えている。

生活品等は住友販売と商人販売とがあった。賃労働は都市的生活となっていた。

人工的な都市の装置に比べて、精神生活は驚くほど祈りの場面がある。人為を超えた神に従わざるを得ない人々の姿がうかがえる。一年中、銅山の繁栄と操業の安全を祈る年中行事が生活の中に繰り込まれていた。

江戸時代には内部が広い舗方役所が娯楽場として使われた。医師や鍼師が常駐し、診療所もあった。山師と稼ぎ人の共助の経験から、近代医療制度や社会保険制度のさきがけが見られた。

物資の供給と後背地

立川中宿は別子銅山と新居浜の中継基地である。中宿から別子銅山への急勾配の山道は立川仲持が背負って運んだ。中宿から新居浜までは勾配も緩やかで、おもに馬で運んだ。上げ荷は主に飯米を中心とする食料で、下げ荷は粗銅であった。立川仲持は300人以上で、女性の重要な稼ぎとなっていた。地域の生業として定着していた。

銅山の操業を支える重要な物質は木炭や木材であった。別子銅山の開発が進むにつれて林地も拡大していった。やがて幕府領の山林からだけでは賄いきれなくなった。土佐にも製炭、製材に入っていた。土佐の山も遠隔化していき30km以上の道のりとなった。炭宿と呼ばれる中継基地が設けられた。二宿次ぎでも運搬され「遠町」と呼ばれた。別子山村の女性と思われる炭中持は130人以上となった。

積出港市新居浜の展開

新居浜は西条藩領に属し領内最大の漁村として栄えていた。すでに立川銅山の口屋が開設されていたが、1702年(元禄15年)に住友が別子銅山の口屋を開設すると更なる発展の画期となった。幕府から別子銅山の永代請負が承認されて、住友は長期的な構想にも

とづく経営環境を築き始めた。新居浜は鎖国の中で貿易拠点港となる可能性を秘めていた。住友は専属の船を雇った。別子銅山の双幅図が描かれた頃(天保2年)は、170~200石積の銅船4艘、40~70石積の飛船4艘が就航していた。幕府に許され日の丸の船印を掲げて航行した。

口屋は別子銅山の必需物資の購入・保管、為替送金、馬荷運送、粗銅の船積業務をしていた。ほかに、接待施設の役割も担っていた。大阪と別子銅山の交易事務所でもあり、同時に大阪との交流の窓口であった。新居浜の手代たちは、狂歌や俳句文化にもかかわっていた。

労働力維持の飯米の確保は、随時条件は見直されたが、飯米の7割近くが延払いで入手できる買請米制で、住友に有利であり続けた。

また、口屋は西条、小松、今治、松山藩の送金業務とかかわり金融センターでもあった。

東予の経済拠点として発展する基盤をつくってきたが、幕府や藩が消滅して、自前で新たな物流や金融を構築することが求められた。銅の最終製錬が立川でできるようになり、銅製品の輸出も視野に入ってきたが、大型船が接岸できる港がなかった。やがて新居浜は鉱工業都市へと変貌していく。

コラムー山銀札

江戸時代は金、銀、銭の3種類が流通していた。東日本は金遣い、西日本は銀遣いであった。別子周辺では銭が主に流通していた。そして銭匁勘定が行われた。銭の枚数が固定化されてきたが藩によって枚数が異なっていた。別子銅山では1匁を銭72文とする山銀という計算上の通貨単位を使う。山銀1匁銭100文で維新を迎える。維新时期になると銭不足、藩札停止が懸念されると別子銅山では実際に山銀札を発行し、独自の通貨圏を維持していた。

第5章 銅貿易を支える仕組み

長崎貿易と銅統制のあらまし

17世紀末まで国内外での銅商いについてはほとんど制限がなかった。銀の枯渇から幕府は銀の海外流出を抑制するようになった。元禄期になって長崎貿易は幕府の官営化が始まった。17世紀末から長崎貿易全般に統制が始まった。銅座と長崎会所が一体化する。

銅統制の変遷

幕府による銅統制は、第一次銅座、第二次銅座を経て、18世紀半ばの第三次銅座の設立で、国内用、輸出用とも銅全体が専売品になった。銅は長崎貿易の主要輸出品となっていたので、集荷と輸出方式が変遷していった。

運上付請負法→元禄銅座→銅吹屋仲間長崎廻銅請負→御割合御用銅→第一次長崎直買入→元文銅座→第二次長崎直買入→明和銅座

銅吹屋仲間とその役割

17世紀中期、銅貿易を担ったのは銅屋であった。泉屋住友、大阪屋、平野屋などは鉱山業から精錬業まで行っていた。銅屋には銅製造にかかわらない者もいた。銅生産の拡大から小吹屋が続出してきた。やがて銅座配下を経て銅吹屋仲間に入り込まれていった。18世紀になると貿易統制が強まり、銅屋は銅山経営にシフトしていく。そんな中で別子銅山は全産銅の28%を占めていた。銅吹屋仲間長崎廻銅請負の仕法で粗銅はすべて大阪に集まった。銅吹屋仲間17名は固定してくる。18世紀中期になると銅仲買が台頭してくる。

長崎ではオランダ向けの銅は出島のオランダ商館の倉に保管されたが、唐人向けの銅は銅商人の倉に保管された。

オランダ人と唐人－鎖国政策でキリスト教徒のオランダ人は出島で厳重に監視された。キリスト教徒でない中国人は長崎市内に雑居した。密貿易が増加したために居住区を制限して唐人屋敷が建設された。やがて、中国船専用の倉庫区域が唐人屋敷前面の海を埋め立て造成され、新地と呼ばれた。現在は長崎新地中華街となっている。

輸出銅製造を支えた技術

鎖国前の輸出銅の形状品質ともさまざまであったが、鎖国後にはオランダ東インド会社が南蛮吹、棹吹した銅を標準とした。

南蛮吹の方法は、はアグリコラ著「デ・レ・メタリカ」に掲載されているが、南蛮吹はヨーロッパ技術の直輸入ではない。海外からの情報をヒントに蘇我理右衛門が開発したものである。南蛮吹によって輸出銅で365貫目の損失を防いでいる。

デ・レ・メタリカ－16世紀にドイツの医師・化学者であるG・バウアーによって採鉱冶金技術全体の体系をはじめて書かれた12巻からなる技術書。ラテン名G・アグリコラの名を使いラテン語で著述した。ラテン語の書名は「金属について」。第11巻に金・銀を銅・鉄から分離する方法がまとめられている。画家B・ウェフリングによる292枚の木版画は生き生きと描かれている。ゲーテは、この書を「全人類への贈り物」と絶賛している。

世界遺産に登録された石見銀山では、現地で歴史資料が出てこなければ、デ・レ・メタリカの中に糸口がないかと検討しようと考えた書物でもある。

住友の銅吹所と「鼓銅図録」

住友が大阪に来て最初に設置した吹所は内淡路町であった。そして2代目・友以が長堀に移転する。1690年(元禄3年)本店・居宅も移転してくる。明治になると各銅山では現地精錬するようになり、住友も立川に精錬所を移す。

オランダ商館一行は、江戸参府の帰途のたびに長堀の吹所・本店を訪問した。住友は「鼓

銅図録」と鉱石見本を贈呈した。シーボルトが持ち帰った「鼓銅図録」は、すでに欧米で知られていた。

オランダ商館の吹所訪問－日本銅は、長崎貿易における決済品の主たるものであったと同時に、オランダ船にとっては船の安全を確保するための底荷(バラスト)としても重要な品であった。歴代商館長は江戸参府の帰路に泉屋の銅吹所を見物するのが慣例化していた。泉屋では、商館長一行の到来に先立って、役所への届け出、その準備、当日の警護、案内の役割分担、見物後の饗応の手順、見送り、手土産の用意、検使・通詞ら諸役人に対する挨拶、阿蘭陀宿から一行出立に際しての餞別・挨拶状に至るまで例年詳細に記録して次年度の到来に際して遺漏のないように備えた。一行と泉屋の間に立って、阿蘭陀宿の主人である銅座が、連絡・案内の労をとっている。オランダ商館長一行を見物しようと屋敷を訪れる泉屋の銅集荷先の人たちの受け入れ・賄いもあった。

コラム－住友銅吹所跡の発掘調査

1989年(平成元年)、再開発計画が起こり、大阪市文化財協会によって発掘調査が行われた。江戸期の精銅工場の遺構・遺物が多数出土した。「鼓銅図録」に描かれたとおりの作業が行われていたことが判明した。人工地盤の下に埋め戻されている。現在は史跡公園になっている。大阪歴史博物館で操業当時の様子がうかがえる。

住友銅吹所跡－長堀の銅吹所が新居浜・立川に移転しているので、同規模の吹所が立川中宿跡地に埋まっている。新居浜市立立川保育園の管理図面も住友の図面を踏襲しており、立川中宿・精錬所跡が「Eの字型」に残っている。

第 6 章 銅の生産と関連諸産業

銅の産業連関をさぐる

明治初めのお雇い外国人は、銅製品や銅合金製品の多さに驚いた。銅は金銀よりも豊富に存在し、採鉱・精錬される量も多い。銅山の開発には多額の費用が必要である。大規模経営の要は分業と協業にある。

銅合金－日本の伝統的な金工分野では、独特の色を持つ合金を「色金」と呼ぶ。赤銅と四分一などである。赤銅は烏金と言われ、銅に金を3～5%加える。丁銀の四分一は銅に25%銀を加える。銅鍋で沸かした湯に、少量の緑青(塩基性炭酸銅)、丹礬(胆礬・硫酸銅)、さらに明礬などの薬品を加えて合金を煮ると銅色の表面が一変する。赤銅は艶のある紫黒色に、四分一はイブシ銀のような味わいある色を呈する。

銅生産を支えた人々と経済の仕組み

別子銅山に携わる人たちが多く存在していた。経費から見ても銅山経営には、稼ぎ人以外の多くの人に支えられていることがわかる。経費の1/4は炭代であった。

鉱山で労働力を集める最大の要は、安定的な食糧の確保であった。住友は幕府領からの買請米制度で2/3を確保した。100～150石積船と40～60石積船の廻米船で運ばれた。

粗銅は100石積程度の銅船に銅16トン積んで運んだ。新居浜～大阪の最速は6日、平均で10日、日和が悪いと20日を要することもあった。銅船も大型化して19トン積、29トン積も出てくる。

銅生産と生活維持の必需物資の在庫調整や調達のために為替を利用していた。18世紀初めに幕府から銅山振興の一万両拝借を原資として、名目金貸付を展開したことが知られている。

銅精錬と産銅経費

大阪の河口に着いた粗銅は、川船に積み替えられて長堀の銅吹所へ運ばれた。銅吹所では吹所差配人のもとに精錬された。工程は「鼓銅図録」に細かく描かれている。

別子銅山では、生産銅、財、サービスなどの管理のための帳簿が作られていた。生産費、歩留りなどが計算され、別子銅山の生産動向、生産コストが把握されていた。こうして割り当ての御用銅を安定的に生産した。

銅の加工とその用途

日本の銅加工は長い歴史を持つ。京都は17世紀初頭から金属加工の先進地であった。大阪夏の陣後の都市再生過程の中で、大阪に集まってくる。17世紀後半、大阪は輸出銅を中心とした一大生産地になる。銅加工業者は島之内およびその周辺に集まった。17世紀後半には江戸でも銅細工が盛んになった。

古銅の流通

大阪は輸出用棹銅の生産地として発展していくが、京都では仲買が古銅を買い集める。18世紀になると産銅が漸減し、国内向けの地売り銅の高騰で古銅が注目される。警察的観点から大阪、京都、江戸で古銅の統制が起こる。古銅流通のすそ野は広く問屋の下に加工職が営業をしていた。水車伸銅業者が専門化していく。

コラムー船と銅材

銅が和船を飾ったことはよく知られている。船首の甲金、小口を隠す頭巾金物、鉄釘の頭の埋木にはめ込んだ入頭など被覆として用いられた。

海外の外洋を航行する大型船にも相当量の銅が使われていて、開港場には修理用の銅を

準備した。木造大型帆船で30トン近くの銅を使用していた。

第 7 章 住友の江戸進出

銅商いと吹所の経営

江戸の人口が100万人となり、全国最大の消費地となった。また、先進地の上方と東北・関東地方を結ぶ中継都市の役割を求められた。社会的、経済的変換期に住友が江戸に進出した。拠点を中橋上楨町に置き、幕末まで営業を続けた。別宅を大門通りにも構えていた。

中橋店の役割は、別子銅山の安定的な経営に寄与することを中心とし、情報収集や交渉窓口であった。併せて所有する屋敷の管理であった。

やがて浅草諏訪町に吹屋を構え、各地からの銅の製錬をはじめたのは、足尾銅山の銅はすべて幕府が買い上げるのを原則としていた事情による。1701年(元禄14年)に銅座を設置すると足尾の輸出銅は廃止された。中橋店は痛手を被った。

幕府から悪貨改鑄に関連する銀銅吹き分け業務が住友をはじめとする銅吹屋仲間に命じられた。しかし、銅吹所が焼失して、以後は京都で吹き分業務をすることとなった。古銅商人の力が強くなって銅吹屋仲間の存在は薄れた。

「浅草米店心得方」にみる住友の事業精神

銅精錬業の火が消えてから30年が経過した1746年(延享3年)、5代友昌の実弟の友俊は札差業への進出をもくろんだ。江戸は武士社会の都市なので、現物支給の米を貨幣に変える必要があった。公認の札差仲間に入るのに周到な準備を行い成功する。

「浅草米店心得方」は儉約を重視の上に、勘定を確実にする指針がすべての基本となっていた。

都市社会の一員としての住友

江戸へ進出し出店を構えた住友は、江戸の都市社会の一員として社会貢献を果たすことが求められた。災害時などの物資提供の施行、町の積立金の資金管理、町内の番人差配、寺社の修理寄付などを行った。

店員は総勢14人と少数精鋭のキャリア達で当たった。

中橋店の両替業進出と挫折

1805年(文化2年)、中橋店は両替業をスタートさせる。前年に風水害の被害を受けた別子銅山は、幕府から8000両の救済金を受けた。これが中橋店の営業資金に投入された。以後、中橋店は貸付・為替・両替の事業を本格化、拡大していく。

しかし、社会全体の景気後退や禁輸制度の急速な変化を背景に、業績悪化の道をたどった。中橋店と浅草米店の連携を密にしたが、江戸後半の中・下級武士の困窮や御用商人の

不振から業績は悪化をたどり、幕府崩壊とともに両店は閉鎖した。

コラムー娯楽としての開帳と浅草米店

江戸では成田山新勝寺、信州善光寺、嵯峨清涼寺の開帳は人気が高かった。清涼寺の開帳には住友は大きくかかわり、浅草米店が実質的に差配を取り仕切った。住友は投機行為をかたく慎み、堅実な経営に徹したが、都市文化のパトロンとして責任は別モノであった。住友は江戸の一員として奉仕した。

※下巻の口絵4の別子鉱山の現況図は、旧別子ではない。旧別子の谷、背景の山並みが現況に対応していない。

第 8 章 イエの構成と組織

400年以上続き、近世の銅貿易を支えた住友のイエの構成は、職種の違う人でいくつもの組織をつくり、当主の家族を中心に、重層的・求心的に編成されていた。一家中、親類中、手代中、別家中、出入方中、吹所大工中、家守中、町中などであった。

住友の一家中の構成は簡素であったのが特徴である。タテ型の東国型でなく、ヨコ型の西国方であった。また、住み込みの本店と、通いの吹所という異質な職場形態も特徴であった。功労者には別家として泉屋の屋号を名乗るのを許した。

コラムー本家をとるまく親類中

簡素な構成の住友家であったが、周りに分家、諸近隣の名家との婚姻・養子などを通じての有力町人のイエが重層的に配置されていた。背景として家が途絶えれば御用召し上げの恐れがあったので、相続人を得て家を存続させることが重要であった。親類中での相続争いも生じ、町奉行所の判決を仰ぐことあった。結果として、主人と幹部手代による経営の形が出来上がった。

第 9 章 大名との交際

館入と大名貸

住友は銅の採掘販売や大名貸の融資で大名と取引をした。館入の肩書きで大名の御用を勤める。館入は名誉な肩書で家の信用を得る反面、儀礼や金銭の負担も出てくる。大名との交際で情報収集が常日ごろから必要となる。明治維新で26家と取引があった。

取引先は、大阪城代を務めるような有力な譜代大名、住友が経営する銅山の地元の藩、銅取引関係の藩。

大名貸の展開

大名貸は踏み倒しの危険が伴っていたので共同出資などで危険を回避していた。寛政の

改革の18世紀末、約80年間の古貸^{こがし}の債権のある10家と旗本5家との解消に努めた。その後取引を広げ、19世紀前半には急拡大した。

対馬藩と朝鮮貿易

朝鮮貿易でも銅は主要な輸出品で、住友が主たる供給者であった。対馬藩は品質から別子銅を指定していた。しかし、対馬藩の借財は増え続け、住友の債務中に占める対馬藩の貸付額は断然1位であった。

コラムー朝鮮通信使の記憶

朝鮮通信使は、朝鮮国王の国書・進物を携えて日本に派遣された。江戸時代に12回来日している。住友の大阪本店にも記録があるのは、大名との付き合いによる。

第10章 都市大阪が育んだ住友

奉公人たちのキャリア

江戸時代の大阪は、大阪城の西側が開発され、水運が発達する。大阪は、商業都市でもあり、産業都市でもあった。

18世紀中期は、住友の経営は逼迫^{ひっぱく}する。家法を成文化し、本店、銅山、分店の制度を整える。住友に長く勤める者、重要な役職に就くものの多くは別子銅山の勤務を経験し、本店に移った。

大阪本店に隣接する吹所

18世紀に入り各地から銅鉱脈の検分依頼が来るが、有望なものはなかった。長堀吹所の技術は世界から高く評価されていた。賃銀は別子銅山の労働者の1.75～3.75倍を得ていた。技術は子弟関係のもとで伝授されていた。しかし、吹所は本店の監督のもとに運営されていた。

住友の吹所への粗銅、燃料、製品は営業権を独占していた川船で運ばれた。

金融業と借家・新田経営

分家を中心として展開した住友の金融業は銅鉱業や貿易の利潤を元手としたが、うまくいかなかった。住友は江戸で中橋店、大阪で豊後町店の両替店を設け、札差業の浅草米店の収益で別子銅山を支えたが、幕府の経済政策の中で資金繰りに窮していく。

都市社会の自治と商家

1802年(享和2年)の洪水のとき大阪の有力商人14家が救助を行った。住友も大店にまじって褒美金を受ける榮譽に預かる。70年ほど前の享保の飢饉のときも同様に対応していた。功德の施しに対して幕府から家屋敷の諸役免許の特典を与えられる。都市自治

の芽生えを持ち始めていた。経済力のある商人の社会貢献が求められ、町内で発生した事故・事件を自ら適正に処理していく。大阪三郷の仕組みは政治支配の原則は変わっていくが、企業精神の根本は揺らぐことなく今日まで継続している。

コラムー住友家の縁の社寺

初代政友(文殊院)は、京・寺町通り高辻の浄土宗の永養寺を菩提寺として。2代友以は、大阪で表向きは浄土真宗の檀家となり、日蓮宗の久本寺とかかわった。大阪における住友の菩提寺は実相寺であった。1852年(嘉永5年)の寺社文格控は、住友と恒常的な関係を持つ各地の15の寺社が収録されている。京・清凉寺と伊勢神宮は特別に扱われている。

伏見稲荷、春日大社、多賀成就院、庄内大山の善宝寺、山崎聖天、住吉大社、高野山西禅院、神応寺、北野天満宮、長楽寺、法善寺、四天王寺、泉福寺。

第11章 文化と公共への貢献

図書館の開設と大阪の文化的発展

1904年(明治37年)、15代友純は長く受けた恩恵に報いるために大阪図書館(現在の大阪府立中之島図書館)を寄贈した。併せて図書購入基金も献納した。しかし、住友の名称は冠することはなかった。当時、東京や京都にはすでに官立の立派な図書館が存在していたが、国内第二の都市である大阪には小規模のものしかなかった。

図書館に事務局を置く大阪人文会は、例会を7回まで継続した後、懐徳堂記念会に発展解消した。大阪図書館は文化芸術の発展を担うものとして期待された。

懐徳堂記念会ー懐徳堂は享保9年(1724)、大坂町人によって創設された学問所である。一時は、江戸の昌平学問所と並ぶ隆盛を誇った。明治2年(1896)に一旦閉校したが、大正5年(1916)に再建された。懐徳堂の復興と顕彰を進めたのが財団法人懐徳堂記念会である。再建された懐徳堂は昭和20年(1945)の大阪空襲で焼失した。昭和24年(1949)、大阪大学文学部設立時に戦災を免れた資料が寄贈された。

地域への貢献と善行の家

長堀茂左衛門町の浜手で難工事の深井戸を掘るとうまく水脈に当たった。世間で「全て累代隠徳の^{しるし}験にや」と評判になった。

災害時は救済を行い、銅精錬稼業で火消道具を装備していたので大阪の消防の一端を担っていた。津波の際も少なからず負担に応じたと思われることが、地元町人たちが建立の碑文から読み取れる。

人をつなぐ主家の学芸

江戸時代から住友家では、幅広い教養をもつ人物に恵まれた。中でも三代・友信は狂歌、

俳諧、和歌、香道などの諸芸に親しみ傑出していた。作歌の伝統は四代・友芳、五代友昌、八代友端、九代友聞^{ひろ}に引き継がれた。

書跡から茶道、蹴鞠、歌人などとの交流がうかがえる。

奉公人たちの教養

鼓銅図録の文は吹所支配人の増田半蔵が記した。当時の東アジアの共通言語の漢文で書かれたすぐれた学術書である。幹部手代の能力の高さを示している。

和歌は主人や幹部手代たちの文芸活動だった。狂歌や俳句は同好者や家内に広がりを持っていた。東予の俳壇は京阪や松山とのつながりが深かった。

江戸時代の住友家や店には多くの書籍が所蔵されていた。

1908年(明治41年)、住友銀行東京支店内で創刊された雑誌・井華は、従業員が自主的に品格と才能を磨くものを目指した。

伝来品とコレクション

住友家の伝来品は浪華の豪商の華麗なイメージとはかけ離れ、堅実で実用的な点が指摘されている。中には三代友信、六代友紀のような学術に傾倒した主人もいた。

絵画の使用方法を見ると応接の調度として限られ、人気画家を庇護することもなく堅実な暮らしぶりであった。

住友友純の収集は公益への奉仕の自覚が強かうかがえる。中国文化に敬意をもち青銅器を収集した。1960年(昭和35年)、財団法人泉屋博古館を設立し、古銅器を中心とした収集品の保存・研究に寄与する。一般にも公開している。

大正期に入ってから茶道具や能用具の収集は私的な側面が強くなる。

コラムー民の力量

明治中期になると住友は大阪財界を代表する地位を占めるようになり、大阪の名士にふさわしい社会活動へ内容が変化する。

楠正成銅像の献納、大阪図書館の開設、東北帝国大学の鉄鋼研究所創設。大阪市美術館用地としての茶臼山の私邸敷地の寄贈、市民の大阪城づくりへの募金、安宅コレクションの寄贈。

別子銅山開坑三百年記念事業の住友財団の設立、新居浜市へ別子銅山記念図書館の寄贈。

第12章 幕末・明治の変革

近代のめばえ

幕末から明治期にかけて世界秩序が変動、東アジア諸国は解体と再編が強制されることとなる。アヘン戦争でイギリスの中国植民地化がはじまり、その情報が来航船によって長崎にもたらされた。住友でもこの極秘情報は長崎出店から江戸中橋出店に伝えられた。住

友は銅貿易を通じてグローバルな視野で時代を見据えることができた。

住友のような豪商が国益・公益を論じるようになって日本の近代化が芽生えたといえる。住友では幕府から産銅振興を諮問された寛政の改革以降のことである。住友では南蛮吹国益論が登場する。

住友が近代化の主体階層と意識するのは、ルーツが武士であり、大名であったと述べるところから始まる。

日本銅のかげり

産業革命の成功によりイギリス銅がアジアに大量に流入する。イギリスのインド進出は顕著で、植民地支配のさきがけとなる。中国雲南地方での銅山開発、アメリカの南米産銅が出てきて、中国市場での日本の劣勢を補てんした。やがて主要貿易港は長崎から函館・横浜・兵庫へと変わっていく。

幕末の苦難と争乱

幕末期の住友の経営危機は、別子銅山の経営難だけでなく金融部門の経営破たんが主要因であった。当主に代わって実力のある番頭が台頭してくる。

番頭政治の出現は、住友家の自由闊達な意見上申の尊重という経営精神の土壌より生まれた。広瀬幸平は若輩であったが優秀な才能から36歳で別子銅山支配人になる。

長崎輸出の御用銅が廃止となり、地売銅値段での銅座での買い上げでも別子銅山の採算は取れないでいた。このままでは休山になる窮地に陥っていた。

別子銅山の助成策の買請米も廃止となり、広瀬幸平は職員には無給奉仕、稼ぎ人には賃金引下げ、米代の引き上げの手を打ち、大みそかに京都へ買請米継続の嘆願に向かう。正月に伊予の幕府領米の払い下げを獲得する。しかし、稼ぎ人の離山があらわれ、ついには松山藩へ直訴するために下山するにおよび、真光寺・瑞応寺にとどめ説得する。

維新の危機はどのように克服されたか

1867年(明治元年)、徳川慶喜の大政奉還により新政府が樹立した。住友の長堀銅吹所をはじめ大阪の銅吹所および大阪銅座は薩摩藩によって差し押さえられたが、財政難の新政府の東征軍費捻出策で吹所作業は再開された。

広瀬幸平は天下の情勢を見極め、幕府側から新政府側に方向転換する。土佐藩に接収された別子銅山も広瀬のうそいつわりのない嘆願で川田小一郎を動かし、土佐藩が新政府の代理として住友の経営を所管することとなり経営を継続する。その後、1873年(明治8年)の日本坑法をもって住友が鉱区権を手に入れる。

依然厳しい状況下、別子銅山の売却でイエの存続を図る動きが出てくる。ナンバー5の広瀬は「逆名利君、謂之忠」の精神で暴挙を食い止める。大阪本店では、鉱業の再生と住友家の永続の基本方針が取り決められた。

新政府の鉱山司として出仕した広瀬は、旧態依然とした大阪本店の改革に迅速に取り組む。「相変わりに、御芽出度候」と言っている。

総理が生まれたとき

広瀬は3000～4500人の稼人の統制、ひいては国益に尽くす考えが武士への取り立てを再挑戦したが、これも時勢の変化を読み取り断念する。

版籍奉還で諸大名が地方行政にあたるために国元へ帰るのを見て、住友家も国元の別子・新居浜に移住を希望する。問題は先祖の祭祀の継承であり、新居浜の瑞応寺に祖先崇拜の「住友氏霊堂」を建立した。霊堂は別子銅山閉山時に十六代友成によって「長泉堂」と命名された。広瀬は住友家を国家とみなして近代化法を制定した。住友家総理代理人となり、近代的経営の根幹である「資本と経営の分離」を考え出した。

コラムー変革の時代を見通した「半世物語」と「町人考見録」

広瀬幸平の「半世物語」は、イエの永続をめざして書き残した日本で早い時期の企業者自伝である。「住友が倒産しなかったのは自分が体を張って近代化したからだ」と述べている。享保改革期に三井総領家三代目の三井高房の「町人考見録」は、京の豪商の没落原因を考察している。両著とも新時代に旧来の体制にしがみついていたからとしている。

第13章 近代化への対応

別子銅山のイノベーション

19世紀末から20世紀にかけては、産業革命と技術革新の時代であった。日本の産業革命は、製糸・紡績業と鉱山業から始まった。鉱山業は重化学工業の生みの親であった。現在に続く大企業は鉱山から生まれてきた。

幕末の開港によって世界経済に編入された。国際化、近代化しなければ植民地の危険をはらみ、別子支配人の広瀬幸平は、在来技術では対抗できないことを痛感していた。政府のお雇い外国人から西洋の技術を学び、1874年(明治7年)に周囲の反対を押し切ってルイ・ラロックを広瀬の6倍の給料で雇い「別子銅山目論見書」を作成させる。総事業予算67万円は当時の純利益の7年分に当たり、その20%はフランス人技師の人件費であった。日本人の手で実施するために、塩野門之助と増田好造^{よしぞう}をフランスに留学させる。

「別子銅山目論見書」を参考に採鉱、運搬、製錬の近代化を進めていく。1884年(明治17年)、新居浜製錬所建設の許可がおりる。工都新居浜の出生証明書であり、鉱業から工業へ展開する契機となった。

**大企業は鉱山から生まれてきたー別子銅山→住友 日立銅山→日立 足尾銅山→古河
佐渡金銀山・生野銀山→三菱 久原鉱業所→日産 小坂銅山・石見銀山→藤田組
三池炭鉱→三井**

洋式製錬所として建設された高橋製錬所、惣開製錬所、山根製錬所、四阪島製錬所の中で唯一施設が残ったのが、山根製錬所のレンガの煙突である。鉱業から工業へ転換した工都新居浜のシンボルであり、工業立国日本のメモリアルである。

近代家法の制定と家制度の確立

住友家から全権を委任された広瀬幸平は、職制と規則を整備し、外部から人材を登用した。住友家が250年あまり涵養してきた良法にもとづき、近代的な明治十五年家法を制定した。続いて、大日本帝国憲法が發布されると家法を見直し、明治二十四年家法を制定する。

ゆれる経済政策との苦闘

大隈重信の積極財政政策のもと住友も五代友厚らと大阪財界中心に積極的に展開する。西南戦争の戦費調達でインフレーションを引き起こす。その後、松方正義のデフレ策で明治新政府に取り入った新旧の商人が淘汰されていった。国内の不景気に追い打ちをかけたアメリカの銅の価格の切り下げで世界の銅価が急落する。別子銅山の近代化も見直され、高橋製錬所も一時停止する。

三井、三菱、古河、藤田などは政商から民業へと経営転換をした。住友は別子鉱山の持続経営と無借金経営で乗り切るが、拡大路線の限界でもあった。

事業方針をめぐる葛藤

塩野門之助は、別子ほどの大鉱山でも鉱脈が衰微するので、将来の買鉱製錬、別子鉱山以外での経営を想定して新居浜に中央製錬所建設を考えていたが、広瀬幸平に認められず別子鉱山を去る。広瀬は岩佐巖に意見を求め、別子鉱山の活路を製鉄・化学事業に見出した。惣開に製鉄所、山根に湿式製錬所を建設する。また両製錬所、鉄道、機械課の燃料として庄司・忠隈探鉱を買収する積極経営は銅価の変動と別子鉱山の経営回復にあった。フランスのシンジケートの銅買占めの企画は崩壊で銅価は下落する。広瀬がはじめた新規事業の経営悪化と煙害問題が起こり、ついに広瀬は辞職する。事後は甥の伊庭貞剛に一任する。

近代化と環境対策

明治維新を契機に日本は世界に追いつくために富国強兵・殖産興業政策を進めた。広瀬幸平が職員をフランスに留学させたが、欧米の大学でも技術者教育を始めた時期であり、世界と同時期に先端技術を学ぶことができた。

別子鉱山の採鉱、製錬、運搬にわたる近代化は、思わぬ煙害問題を起こした。伊庭貞剛は、製錬所の四阪島移転を決断したが、予想に反して煙害を東予一円に拡大した。伊庭の意向を継いだ鈴木馬左也は煙害を認め、生産制限を盛り込んだ煙害賠償契約を締結する。

その後煙の出ない製錬所を研究し、ついに世界に先駆けて煙害を克服する。

伊庭と鈴木は荒れ果てた別子山に植林をして緑を回復する。ジャン・ジオノの「木を植えた人」というフィクションがあるが、2人は100年前に実行した。

「木を植えた人」－1953年にアメリカのある雑誌の編集者から「実在した忘れがたい実在の人物」を書いてほしいと頼まれてジャン・ジオノが書き送ったのが「木を植えた人」の原稿であった。ところが編集者が独自の調査によって、エルゼアール・プフィエなる人物がバノンの養老院で死んだ事実がないことがわかると、原稿を送り返してきた。そこでジャン・ジオノは著作権を放棄して、原稿を広く公開した。それがたまたまニューヨークの「ヴェーグ」誌の目にとまり、英訳版が1954年の同誌に掲載された。やがて13ヶ国語に翻訳された。

コラム－住友家と東京美術学校

東京美術学校は、極端な欧化主義の反省から「日本固有美術の振作発揚」を目的として設立された。欧米巡視旅行から帰国した広瀬幸平もパリ万博見学の経験から、日本文化の再興を提唱した。東京美術学校へ楠正成像、松方正義銅像、別子銅山図版画、銅鏡型文鎮、川田小一郎銅像、広瀬幸平銅像、小型楠正成像などを発注した。芸術系大学とパトロンの関係のさきがけとなった。

第14章 世界市場への参入

別子銅山の事業から金融・製造部門へ

総理人の業務を代行することとなった伊庭貞剛は、尾道会議で銀行の創立をはじめとする住友の方針を決め、明治29年家法を定め、理事の合議制を確立した。伊庭の事業方針は「君子財を愛す、これを取るに道有り」というものであった。四阪島への製錬所移転、別子山への年間100万本植などがこれに当たる。総理事に就任した伊庭は事業方針として「住友の事業は、住友自身を利するとともに、国家を利し、かつ社会を利する底の事業であらねばならぬ」と述べる。

東平の開発で大量出鉱、四阪島製錬所の中央製錬所体制が実現し、端出場水力発電所完成で鉱山は電気時代に入る。東平に続き端出場の開発が始まる。採鉱本部も東延から東平、端出場へと移っていく。

住友本店では銀行を設立する。伊庭は広瀬の重化学工業路線をあきらめてはいなかった。住友伸銅所、住友铸造所を開設する。伊庭の時代に住友の根幹事業の鉱山業、製造業、金融業が出そろふ。

世界市場をめざした事業展開

19世紀終わりから20世紀にかけて世界は確実に電気の時代に向かい、世界市場の銅

需要は拡大していった。古河の電気銅が品位の安定性から、住友のK S銅は優れた展延性から市場を占めた。

伊庭の後を引き継いだ鈴木馬左也は、第一次世界大戦の好景気を背景に世界市場参入を目指した。大正デモクラシーの広がりの中で労働問題も起こってきた。

合資会社の設立と大大阪の誕生

鈴木馬左也は住友家長の信頼のもとに、政府の第一次大戦の戦費調達増税に対処するために、住友吉左衛門の個人経営の住友総本店を住友合資会社へ改組する。鈴木馬左也の跡を引き継いだ中田錦吉は定年制を決める。

大阪市は大坂三郷から始まる。第一次拡張期に隣接の28町村を編入した。そして第二次拡張期に外周部44町村を編入し人口211万人となる。関一市長は、「大大阪市の建設はここにはじまる」と宣言する。大阪の近代都市としての発展の契機は、天王寺で開催された第5回内国勸業博覧会であった。住友家は会場として茶臼山別邸の一部を提供した。閉会後は本邸と庭園を寄贈する。また、大阪市の公設市場設立計画に応じて大阪伸銅所と大阪倉庫の敷地を譲渡し大大阪の建設に協力する。

産銅資本から持ち株会社へ

第一次世界大戦後はアメリカが産銅、電気銅を支配する。日本とドイツは工業化で輸出国から輸入国となる。銅需要の高まりから産銅カルテルがつくられたが住友は加わらなかった。政府の保護策に頼るはめになり、産銅事業は日本の基幹産業から後退する。

中田錦吉の跡を引き継いだ湯川寛吉は、別子鉱山を住友合資会社の直営事業から分離独立させ、住友別子鉱山株式会社とした。住友を産銅企業から総合企業に飛躍させようとした。

湯川寛吉の跡を引き継いだ小倉正恒は、広瀬、伊庭、鈴木などの事業精神を継承し「住友の利益を収めるばかりでなく、国家社会に奉仕する」と宣言した。世界恐慌の影響が本格化する。世界恐慌の頂点の時に満州事変、上海事変などで景気は急速に回復し、日本の重化学工業化も加速化し、直営事業の株式会社へ改組が進む。その中で鷺尾勘解治は、別子鉱山は末期の経営であると発表し、地域社会との共存共栄策として新居浜の工業化を提唱する。鷺尾は新居浜を去ったが、新居浜の都市計画は続行される。

住友合資会社は株式会社住友本社として設立された。改組で薄らいだ統制を強化するために内規を制定する。

軍事統制と自主経営のはざま

日中戦争が勃発して住友各社統制経済下に置かれることになった。さらに太平洋戦争開始で戦時体制に突入する。戦時下の1940年(昭和15年)、別子開坑二百五十年祭が開催される。地元へ総額200万円が寄贈される。

小倉正恒の跡を引き継いだ古田俊之助は、国際情勢下での苦難を予告し「事業の盛衰は人な

り」と就任あいさつする。軍の意向から連系会社は会長制から社長制に移行する。やがて軍需会社法にもとづき22社が指定される。戦時の国家統制の中、住友の経営は有名無実となる。

財閥解体と住友グループの発足

終戦によって総理事の古田俊之助は、住友本社を解散する。住友各社は住友本社の決議に従い、住友家に迷惑をかけないために自主的に住友の商号を変更した。

戦後住友グループは21社を数え、1990年(平成2年)、別子開坑三百年祭を祝い、住友家家長と住友グループの社長が別子銅山に感謝の祈りをささげた。住友グループ各社は先人をうやまい、その事業精神をまもり、日本を代表する企業の地位を築いてきた。

コラムー住友と建築

住友の事業精神である「信用・確実を重んじ、独立自営の主体性を有すること」を表したものに建築がある。

広瀬幸平は、八木甚兵衛を見出し、長堀本邸、新居浜分店接待館、広瀬邸を、伊庭貞剛は活機園和館を建築させた。八木は近代数寄屋造りの名匠として、西園寺公望別邸の清風荘、天王寺の住友本邸、鹿ヶ谷の住友別邸を建築した。

野口孫市を招聘して、臨時建設部を設置した。大阪府立中之島図書館、住友家須磨別邸、活機園洋館などを設計した。臨時建設部は銀行支店などを建築していった。そして営繕課に引き継がれ全盛期を築いた。

5. おわりに

本に書かれている内容をダイジェストに要約したが、やはり本は読まないと何が書かれているかがわからない。要約した人の関心事が要約されていて、読み手によって関心事が異なる。合わせて別の本も読まないで、この本の中に書かれている新しい情報が何かかわからない。分担して出筆している担当者の関心事も逆に読み取れる。住友史料室の詳細な歴史資料を読みこんで原稿を書いたところが随所に表れている。それゆえに読者を惹きつける内容の本になっている。

注釈に書いた「長崎御用銅はオランダ船のバラストとしても重要」は、2014年12月に別子銅山東京展の会場で住友社員から紹介された片桐一男「江戸のオランダ人」(中公新書)による。その日の会場からの帰り、東京で入手しないと読めないとの思いで神田古書店を隈なく歩いてようやく奇跡的に1冊を購入した。10ヶ月後に松山で購入した2冊目は、別子銅山コーナーに配架した。本との出会いは不思議である。

12章・幕末・明治の変革、第13章・近代化への対応、第14章・世界市場への参入は、「別子銅山を読む講座」で解説した広瀬幸平から古田俊之助までの歴代の総理事の伝記のおさらいをしているように読んだ。